がんばろう
南三陸町
復興第18号

南三陸マイタウン情報
月刊

発行所
マイタウン企画
本吉郡南三陸町志津川字沼田 150-84
TEL（46）3069
後援：
志津川広報センター

みんな元気に育ってての願いこめて！
志津川保育所入所式

南三陸町立志津川保育所の入所式が「３．11」の震災後３年ぶりに来賓を迎え、４月４日午前10時より保育所遊戯室で開催された。

保育所のある上の山緑地にも津波は来襲したものの、志津川保育所の建物は無事に残り、今年25年度の新入児童27名を迎えスタートした。志津川市街地の中央に位置し、仮設生活を送る児童も多い中で、児童数84名と職員22名での保育生活が始まる。年長さんから０歳児までが５つの組に分かれて楽しい集団生活を送る。

小竹所長さんのあいさつでは、「家庭から離れ、生きる力の基礎を図る場所、あせらず見守ってもらいたい」と父母に話しかけた。お祝いの言葉では、志小三浦教頭先生が「にこやかなほほえましい笑顔が見える。みんなで生活する第一歩」と語り、戸小門脇校長先生は「約束を1つ、先生の言うことを聞いてください」と新入児童に話しかけた。

小竹所長あいさつ

入所児童紹介では、「はい」と元気に手を上げる子、恥ずかしさのあまり泣き出す子や、親に抱きつく子などが見られた。先輩児童が手をつなぎ各組へなかよく向かう、賑やかで笑顔あふれる入所式となった。たくさんの子供たちと若い親子さんの姿に、新しい未来への可能性あふれる南三陸町が見えてきた。

志津川小学校入学式

４月８日午前10時から「平成25年度志小入学式」が開催された。入学児童数は42名で２クラスを確保することができた。多くの小学生を持つ家庭は、子供の成長のためにと近隣の市に、仮設住宅やみなし住宅での生活を選択し、高台移転の整備を早くと言っている。児童は「友だちとまた一緒に遊びたい」と話している。

入学式では初めに、「児童引渡」が佐藤達朗教育長から、加藤敬一校長へと行われた。続いて担任発表があり、「児童呼名」では、ピカピカの一年生たちは「はい」と元気な可愛い声で答えていた。

加藤校長の式辞では、一年生に３つのお願いをし、１つは「あいさつを誰にでもできるように」と言い、併設する戸倉小の子供たちとも仲良くなって欲しいと話した。２つ目に「自分の事は自分でできるように」３つ目は「安全に気をつけて学校に来てほしい」と語った。

お祝いの言葉で後藤町議会議長が、「自然の体験・地域とのふれあいを大切にしていただきたい」と保護者に話し、「豊かに勇ましく成長することを祈ります」と結んだ。

佐藤信一父母教師会長は、「早寝、早起き、朝ご飯」と学校生活のスローガンを入学生と共に唱和した。規則正しい生活で、小学生の安定成長が図られる。新入学生に語り続けたこの言葉を、多くの在校生もこの言葉にならい、すくすくと育っている。

児童引渡

初めて志中の校歌にふれる

４月８日午後から志津川中学校入学式が、志小・入小からの60名の新入生を迎え行われた。昨年は、90名の巣立ちとなったものの、今年は３分の１も生徒が減少した中で、勉学そして部活・生徒会活動にと、新たな環境で児童から生徒として義務教育の３年間を過ごす事となる。

「入学生氏名点呼」では担任の先生より名前を呼ばれ、保護者の前で志中生として認められ階段を上る。

佐藤正幸校長挨拶

式辞では新しい佐藤正幸校長が挨拶をした。松籟とは「松風の音」と話し、松原公園の黒松や山の赤松が志中生の活躍を見つめてきた。登校坂の松籟坂を「しょうらい」とひらがなで示しているのは、松籟を将来とも掛けているとも語り、生徒会誌「松籟」の意味を伝えた。中学校生活での『３つのお願い』は「命を大切にする事」「大きな声で明るくあいさつをする事」「夢を持つ事」を話し、「自分のキャンパスに夢を描いて下さい」と語った。後藤町議会議長は、「社会の一員として人格形成で一番大切な時期」と中学校生活の必要性を話す。

「歓迎の言葉」では在校生代表の佐々木郁哉君が、「明るく楽しく生活できるよう私たちがお手伝いをします」「感謝の気持を忘れず志津川中学校を造っていきましょう」と話し、「誓いの言葉」では、新入生を代表して沼倉秀祐君が「何事にも全力で当たります。私たちに力を下さい」と言い「３年後全員が笑顔でここにいれる事」と結んだ。

今後は生徒会へ参加、自分が希望する部活への挑戦など、新しい仲間と共に中学校生活の、新しい教科や生活環境に向かい頑張ってほしい。

志高入学式　先輩たちが校歌を披露

４月９日、平成25年度の情報ビジネス科18回普通科68回の志津川高校の入学式が新しく佐藤充幸校長を迎えスタートした。今年は情ビ・普通科に110名が入学した。町内から中高一貫教育の中で９割以上を占め、豊里・桃生・北上の中学校からの生徒もいるが、被災前から比べると他町からの志津川高校への入学は減った。ここに被災地の実状がうかがえる。

入学式の体育館に初々しい姿の新入学生の入場が拍手で始まる。一人一人の点呼で名前が４組総て紹介され、佐藤充幸学校長が「入学を許可する」と段上で生徒に告げた。

式辞で佐藤校長は初めに「来年90年目を迎える伝統ある学校で、１万1千人の卒業生を送り出している」と学校の歴史と伝統を紹介した。「変化に対応できる柔軟な思考判断力が求められ、復興に耐えうる人材が求められている」「学ぶことは将来への基礎であり、努力する事は自らのため」「常に考えながら勇ましく充実した高校生活を送ってほしい」と結んだ。

佐藤充幸校長

祝辞では「前を見て上を向いて歩いていかなければならない。若人の創建にかかっている」「近視感的に今を見るのではなく、将来を見据えて」と話し、志高の関わるモアイの事を伝え、「常に感謝の気持を持ってほしい」と遠藤健治副町長が町長祝辞を代読した。

志高での学校生活は、社会に出る為の学力や人間関係を深める力を育む、高校での生活の中で多くの社会人としての基礎を会得する事ができる。多くの活動に「積極果敢」に何事にも向かってほしい。

5人のオリンピックメダリスト来町！

南三陸町の子供たちが一同に会した平成25年度南三陸町スポーツ少年団「結団式」が４月13日の午前９時から、総合体育館で開催された。

開会にあたり山内本部長は「がんばる心を学び、指導者に感謝の心をもってほしい」と挨拶をし、佐藤教育長は「スポーツを通して体が丈夫になり心も育つ。仲間と協力する心を学べる」と激励の言葉を送った。誓いの言葉は戸倉ブルーウェーブ阿部輝君が仲間を先導し、その後で各スポーツ少年団代表の自己紹介を行った。

今年は「オリンピックフェスタ・IN南三陸町」と題して、オリンピック参加選手が、被災地の子供たちと、「ふれあい運動会で共に汗を流そう」と5名のメダリストが来町した。挨拶で水泳のメダリスト柴田選手が、「ルールを守って全力で取り組みましょう」と話してくれた。

５人がメダルを付けて紹介の後で元気に駆けて入場した。１番目は水泳の柴田選手でアテネ五輪で銀メダル、次に水泳の源選手はシドニーで銅メダル、３番目はシンクロスイミングの鈴木選手でアテネで銀、次は柔道の杉本選手はロンドンで銀、最後にソフトボールの高山投手で、アトランタで優勝している。5つのチームに分かれての運動で楽しんだ。

南三陸町スポーツ少年団「結団式」

悲しみあらたに
南三陸町追悼式

南三陸町の「震災２周年」と題しての800人の犠牲者への追悼式典は、「三回忌法要」が町内各所で営まれる中、町の「東日本大震災２周年南三陸町追悼式」で鎮魂の一日となった。そんな中でも町中は復旧工事により一歩ずつ前へ進んでいる。

３月11日のこの日の追悼式は、全国50カ所で同時に黙祷が行われた。式典は東京からの映像を映し出し、安倍総理の被災者家族への追悼の言葉から、天皇陛下のお言葉では「この苦しみをみんなでわかち合う事が必要」と全国に向けお話になられた。佐藤町長は「あの日から帰らぬご家族がいる」復旧活動をする姿に「汗して働く姿は希望の光である。復興はこれからが正念場」と御霊の前で町の再建を誓った。遺族代表では、佐藤さんが「じいちゃん、ばあちゃんに20才の姿を見てもらいたかった」「支えてくださった方に感謝し、一日一日を大切に過ごしたい」と語った。

また追悼の歌では絆・つながりが生まれた。歌詞に一人一人の言葉をつづり歌を作り追悼式で披露された。歌はチリからのメッセージとして、1960年に15mもの津波を受けた時からチリ国と友情をはぐくんできた高校生の、音楽を通した交流の歌が会場に響き、参列した家族に強い癒しと、心の安静を与えてくれた。子供たちの文化を通しチリと志津川の高校生の活動は、町の復興に大きな勇気と夢を与えた。

入谷地区での自己住宅再建進む

4月7日、国道398号沿いの入谷鏡石地区の「住宅見学会」が先ごろ開催された。木造建築での地元の会社が工事にあたった。今、大手のハウスメーカーのモデルハウス見学会はあるものの、地元建設会社・工務店の展示会は、初めて南三陸町内での見学会となった。

「三陸産材補助金」があり、その他にも「県産材の活用の補助金」の制度もある。今回の展示の住宅は「シックハウス」に対応した、木材建築で体に優しい建材をつかっている。その原因を排除した工法で、「木の香りいいね」「仮設から早くこんな家に住みたいね」など、見学に来た方は口々に言っていた。まだ先とはなる高台移転の住宅建設の参考にと、発達した低気圧の中、車での多くの来場者があった。

（お問い合せ▶ 歌津田茂川 丸功建設 TEL 36-2886）

シルク総合開発の開所式には、入谷地区の皆さんが出席され、新たな入谷地区への企業再開の祝福に集まった。

事業の再開でのスタッフが紹介され、高校生の7人が就職し、地元「志高」からは5人で、その他にも1人の8名が檀上で自己紹介をした。若きスタッフを交えたシルク総合開発の入谷工場が、この4月1日から始まった。シルクアミノ酸・絹などの生産があり、桑畑の再生など遊休農地の解消と雇用の創出など、企業誘致の成果が今後の南三陸町で発揮される。町に再び新たな山内甚之丞が開拓した、繭の隆盛がまた生まれようとしている。

あっ！あぶない。

4月7日の戸倉折立の入口のカーブの写真です。道路の上まで波が押し寄せ、通行する車を波が襲っていた。道路には「小石」「海藻」が打ち上げられ、海水も国道まで押し寄せていた。年に数回こんな状況に「国道45号」はなっている。県の国道河川管理局に電話を入れる方もいると聞くが、この場所の波浪対策をこうじるのは難しいとの関係者から話を聞いた。

被災後に普通の低気圧が、中国大陸から日本を横断し、東北北部の太平洋上で「爆弾低気圧」として発達し、農林水産漁業への被害や、地盤低下した市街地の浸水が起こっている。

未来への教訓

大津波の記憶を風化させない

平成25年（2013年）
～ 地元報道より ～

1月の出来事

◆「スピード意識して」仕事始めの式

南三陸町の仕事始めの式が、ベイサイドアリーナ文化交流ホールで行われ、佐藤仁町長が職員ら300人を前に「復興のスピードを緩めることなく走り抜けよう」と語った。

産業の復旧、復興計画は「順調に進んでいる」としながらも「町民には復興の姿が見えないとの思いもある」と強調。「常にスピードを意識しながら復興を進めなくてはならない」と呼び掛けた。

◆計画遅れを懸念

南三陸町の志津川中央地区で予定されている高台移転計画の遅れが心配されている。移転先にある埋蔵文化財の調査に当たる人員を募集しても集まらないためだ。

調査にはスコップなどによる土掘り、土運び作業などを行う人員が必要で、町は昨年60人を募集したが、今のところ集まったのは28人。「年度内は様子を見て、それでも集まらない場合は新年度に対応を検討したい」としている。

◆「復興加速が仕事」

谷公一復興副大臣が1月9日、南三陸町を訪れ、佐藤仁町長らと復興事業について意見交換した。

佐藤町長は要望書を提出し、①復興庁の機能強化②JR気仙沼線の早期復旧への財政措置―など、10項目について説明した。

◆志津川病院・基本計画策定委が提言

震災で被災した公立志津川病院を再建させるための基本計画素案がまとまり、南三陸町病院整備基本計画策定委員会が1月10日、町当局に提言書とともに提出した。

提言書では医師確保が難しいことから、登米市民病院と合同で両病院への医師配置を審議する医師配置運営協議会を立ち上げることを求めている。

◆幼稚園で110番教室

南三陸署による110番教室が1月11日、志津川沼田のあさひ幼稚園で開かれた。この日は署員をはじめ、県警マスコットキャラクター「みやぎ君」や、地元のゆるキャラ「オクトパス君」が訪問し、園児たちが110番通報の正しい利用や防犯などについて学んだ。

◆新成人の門出祝う

南三陸町の町総合体育館「ベイサイドアリーナ」で1月13日、成人式が行われた。式典では大震災の犠牲者に黙祷がささげられ、震災被害から残った中学校や、高校の思い出の写真がスライドで紹介された。友人たちとの懐かしい姿に多くの笑顔と歓声があふれていた。

◆水揚げ震災前8割まで回復

南三陸町志津川魚市場の昨年の水揚げ実績がまとまられ、水揚げ量は5100㌧、金額は13億7800万円となった。震災のあった一昨年より数量は倍増し、金額も44%増加した。

◆声高らかに「ささよ」

南三陸町歌津寄木地区で1月15日、小正月の伝統行事「ささよ」が行われた。小学1年から中学3年までの男の子6人が参加し、地域の大漁と航海安全を願った。

◆友好拠点が完成

南三陸町オーストラリア友好学習館（コアラ館）が完成し、1月19日に現地で落成式が行われた。

震災の支援を行っている豪州ニュージーランド銀行の寄付によって建設された生涯学習施設で、公共施設としては町内第1号の本復旧となる。落成式では行山流水戸辺鹿子躍が披露され、関係者がテープカットをした。先日配置されたタコ窯で焼いたピザなども振る舞われ、完成を喜びあった。

◆新病院、ケアセンター新築

南三陸町は新病院と、隣接する仮称・総合ケアセンター新築の技術提案の設計者を公募型プロポーザル方式で行い、選定する。

ケアセンターは志津川保健センター、地域包括支援センター、子育て支援センターなどが入る施設とされている。

両施設は、ベイサイドアリーナ東側の森林に建設される予定。建物はそれぞれ別棟になるが、両方を連結する計画で、機能面でも連携していく。

設計は年内に終了予定で、26年の年明けに建設着手。27年4月の開院、供用開始を目指している。

◆死亡事故ゼロ3500日

南三陸町歌津地区が、1月14日で交通死亡事故ゼロ3500日を達成。県警本部交通部長から感謝状が贈られた。25日には歌津総合支所で感謝状の伝達式が行われ、町、南三陸署、町内の交通安全関係団体などから10人が出席した。

◆サケ稚魚を放流

南三陸町の水尻川で1月25日、サケ稚魚の放流が行われた。町が志津川淡水魚協に委託して行っているふ化・放流事業で、今シーズンは親魚の不漁に見舞われ、例年の半分ほどの放流になる見込みだ。

3月定例議会② 9議員が質問

高橋　兼次　氏

①水産施設整備への支援策を示せ

②伊里前市街地の土地利用計画は。

町　長　①仮設魚市場やシロザケふ化場は本年度、基本計画、基本設計を行う。ヤマト福祉財団からの支援で漁船給油施設と密漁監視船も整備した。民間事業者への支援は、国の事業を活用しており、来年度当初に2回目の公募をする。

②町有地と買い取り対象にならない民有地が混在することになる。区画整理事業が適用できないため、整備手法を含めた議論が必要だ。詳細は25年度前半に一定の方向性を打ち出したい。

及川復興事業推進課長　②面的にかさ上げすることになるが、整備手法は検討課題だ。

山内　昇一　氏

特別養護老人ホーム「慈恵園」の再建に行政の指導と助成支援で早期実現を。

町　長　再建は、町、法人双方で施設整備の方法の検討を重ねてきた。先日、社会福祉法人・旭浦会理事長らが来訪した際、同会が事業主体となって国の補助を受けて災害復旧事業として再建する旨の説明を受けた。

町としても早期再建を期待している。設計や予算規模などの具体的内容、スケジュールは提示されなかったが、事業着手が25年中で規模を拡充したいこと、開設時期は早くて26年10月以降になることなどの情報をいただいた。法人側の求めに応じた事務指導を行うとともに、支援の内容を検討したい。

大瀧りう子　氏

①灯油購入に助成を

②旭ヶ丘団地で民間業者が行ったゴミ分別実験が好評だった。今後の展開は

③男女共同参画事業の具体的取り組みを。

町　長　①電気、ガスなどエネルギーを主体として生活している住民を考慮した場合、灯油購入だけへの助成は難しい。

②生ごみから作られる液肥を大量に使う場所が町内にない。出口戦略をどうするかが課題。町内で循環するようにしなければならない。

三浦復興企画課長　③町男女共同参画推進計画は理念型の計画。住民への啓発、意識付けの事業をしなくてはならない。ホームページ、広報などを通じた啓発などを今後検討していく。

次号に続きます。